

(2) 「読み比べ」とは

何人かの友達の読みを比べて、よりよい読み方を考えさせる方法のこと。教師が何通りかの読み方に気づかせ、どの読み方が場面にふさわしいかを追求する。

(3) 「役割読み」とは

役割を決めて会話を読むこと。お互いの読み方を聞き合う中で、人物の気持ちが表れるような読み方を工夫することができる。

(4) 「動作化」とは

物語の一場面を実際に身体で表現すること。1年生の児童は、言葉の意味を文脈の中で、より正しく理解していくために身体を使って体験的に表現していくことは効果的である。

(5) 「自己評価」とは

場面ごとの読みのめあてを明記したカードをもとに、児童が自分の読みを評価すること。授業の感想等を書くことにより達成状況や情意面の評価をすることができる。

III 検証授業の実際と考察

【検証授業2】

1. 題材名「くじらぐも」(7/14)

2. 本時のねらい

くじらぐもに飛び乗ろうとする子供たちと、それを応援するくじらぐもの様子を想像して読み、場面と一体とな

った読みができる。

3. 学習過程

	学習活動・内容	時	○教師の支援 ●評価	仮説との関連
気づく	1. 前時の復習をし、本時のめあてをつかむ。 (1) 前時の復習をする (2) 本時のめあてをつかむ。	5	○ 前時の学習場面を音読させることによって、くじらぐものあらすじをつかむ。 ○ 挿絵をもとに、3の場面の様子について話し合い学習意欲を喚起する。 ● 学習のめあてをとらえ、読みの構えを持つことができたか。	○ 会話を中心に読み方を工夫することを確認する。 ○ 下位の児童も正しく読むことができるように範読をしながら音読をする。
	3の場面で、子供たちとくじらぐもは、どんなことをしたのでしよう。 2. 学習場面を音読する。 (1) 学習場面を音読する (2) 指名読する。	5	○ 斉読することにより学習場面を確認したり、読み語りをなくしたりする。 ○ 抽出現の読みの変容をとらえるために指名読をする。	
深め	3. くじらぐもに乗るまでの、子供たちとくじらぐもの様子を考える。 (1) 会話を視写し、読み方を書き込む。 (2) 雲に乗ろうとする子供たちとくじらぐもの様子を話し合う。 (3) 動作化をする。 (4) 相互評価をする。	15	○ 会話文の読み方を工夫させることにより、登場人物になりきり、場面と一体となった読み方ができるようにする。 ● くじらぐもと子供たちの会話を視写し、読みの工夫を書き込むことができたか。 ○ くじらぐもの役を子供たちの役に分かれて動作化する。 ● くじらぐもと子供たちの様子を動作化することができたか。 ○ 教室の前面に大きなくじらぐもの絵を掲示することによりくじらぐもの応援に答え、はきまる子供たちの様子を想像しながら、読み方を工夫する。 ○ 自分の読み方について自己評価できるようにする。 ● 会話文を登場人物になりきり、場面と一体となった読み方ができたか。	○ 視写した部分を中心に音読の練習をする。 ○ くじらが「もったたく。もったたく。」と応援することにより子供たちの「天までとどけ、一、二、三。」の言葉、1回目よりも2回目、2回目よりも3回目と大きな声で読んだ方がよいことを読み比べることによって気付くようになる。 ○ 相互評価や自己評価をすることにより友達の良い自分を自分の読みに生かすようになる。
味わう	4. 子供たちとくじらぐもの会話の読み方を工夫する。 (1) 自己評価をする。 5. 本時のまとめをする。 (1) 自由読をする。 (2) 指名読をする。 6. 次の見通しを持つ。	5	○ 読みの工夫をしたところを確認してから、自由に学習場面を音読する。 ○ 変容を見るために、抽出現の音読を聞く。	○ 学習した事を思い出し、場面の様子を想像しながら読ませる。 ○ 「その時です。」の言葉に着目できるようにし、次の場面を読む意欲づけを図る。

4. 指導の結果

- (1) 動作化はグループごとに、くじらぐも、子供たち、地の文、観客に分け交代しながら行った。それぞれの位置関係を考えながら、意欲的に取り組む姿が見られた。
- (2) くじらぐもの絵を掲示したことは場面と一体となった読みを工夫させるうえで有効であった。
- (3) 相互評価では、友達の発表の良い点に着目させるようにしたが、一定の児童に限られてしまいがちで、自分の読みに生かすまでにはいかなかった。